

福岡県糸島郡平原弥生古墳調査概報

1965 春

福岡県教育委員会

I 遺跡の発見と調査の経過	1 頁
II 主墳の構造と遺物の配列	2 頁
III 主墳発見の遺物	6 頁
IV その他の遺構と遺物	7 頁
V おわりに 一遺跡の特殊性一	8 頁

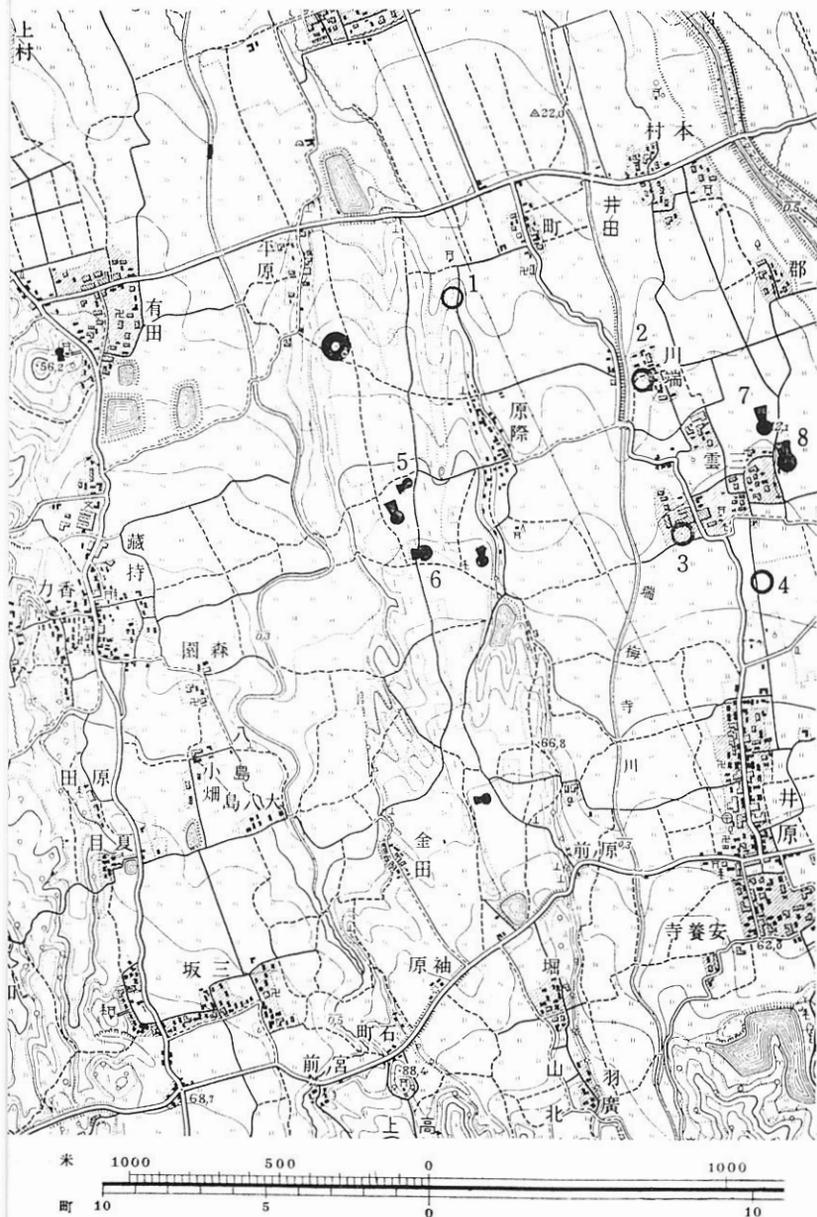
I 遺跡の発見と調査の経過

福岡県糸島郡前原町大字有田字平原 2 番地（通称塚畑）で、昭和40年 1 月18日にこの遺跡は発見された。すなわち、4 月上旬までにこの 2 番地の西半に蜜柑の苗木を植え終る予定で、土地所有者の井手勇祐氏の夫人セツ子ならびに子息信英の両氏が、苗木のための溝を掘開中、約18面分のおびただしい古鏡片と、ガラスと瑪瑙の管玉各 1 個、素環頭大刀 1 口を発見した。

このことが一般に知られるようになったのは、2 月 1 日に、前原町教育委員会および糸島高等学校教諭の大神邦博氏と筆者とに連絡があつてからである。ただちに 2 月 2 日大神氏と筆者は現地を調査し、遺物はとりあえず支登支石墓群出土品収蔵庫に収蔵した。2 月 3 日、筆者は県教育委員会に通報した。県教育委員会は遺跡の重要性と緊急性から、その場で文化財保護委員会に電話で連絡し、筆者等による緊急調査の了解を得た。大神氏は、九州大学文学部考古学研究室に連絡した。2 月 4 日、九州大学から岡崎敬助教授ほか、県教育庁から渡辺正気、松岡史両係員が現地を視察した。

ついで県教育委員会は文化財保護委員会に詳細を報告するとともに、種々接しようした。蜜柑園造成中でもあり、また地下浅いところで、早急な調査を実施しなければ、不測の事態も予想されるので、国庫補助金の交付を受けて、3 月 5 日から20日まで、福岡県教育委員会の主催で、緊急調査を実施することになった。

なお、3 月 4 日までは、筆者個人の調査として、2 月 5 日以来、古鏡群出土地点付近の攪乱土の全水洗をして数千の鏡片と数百の玉類を検出し、あわせて遺構の実態を発掘調査した。その結果、先づ古鏡群を四隅に副葬した墓壙の実態が確認されたわけである。上記の関係で、県教育委員会主催の発掘調査は、それを継続する形で実施され、調査主任を筆者に、また調査員として、2 月 5 日以来、筆者と労を共にした大神氏を委嘱され、県教育委員会から松岡技師が参加した。ほかに国学院大学々生の柳田康雄、佐賀大学々生の堀川義英、吉村勝彦の三君が参加した。



- 平原遺跡
- 弥生遺跡
- 1. 石ヶ崎
- 2. 銅矛鏃范出土地
- 3. 三雲・南小路
- 4. 井原・鍵溝の推定地
- 前方後円墳
- 5. 先山
- 6. 銭瓶塚
- 7. 端山
- 8. 築山

平原遺跡は、雷山川と瑞梅寺川にとりのこされた長さ4km、幅1kmの舌状の段丘上にある。前漢鏡35面等多数の遺物を副葬していた三雲・南小路の甕棺遺跡、および漢中期の鏡21面等多数の遺物を副葬していた井原・鍵溝の甕棺遺跡はこの遺跡の東南方約1.5kmに位置する。

第1図 平原遺跡付近地形図(2万5千分1前原)

調査の結果は下記のとおり、遺跡はこのほか複雑であった。したがって、調査は3月20日をこえて4月に及んだ。県教育委員会の要請により、調査途中で意をつくさない点も多いが、一応の概要をとりあえず報告する次第である。

II 主墳の構造と遺物の配列

内部構造 長辺を東南から西北にする長方形の土壙の内部に木棺を置いたと思われる。土壙は長辺が約4.5m、短辺が約3.6m。現地表から深さは約70cmであった。木棺は木質を遺存していないが、土壙の壙底に見られる薄い炭化層と、これに貼りついた

朱の層をたどることにより割竹形であることが考えられた。朱は一面に鮮かに見られた。これによると、木棺は土壙のほぼ中央に長辺に平行におかれ、長さ約3m、幅は西側が東側より広く、真中で現在約80cmであった。復原すると1.1m位であろう。

墓壙内の遺物の配列 木棺内に遺存した副葬品は、玉類だけであった。2群に分れ、1群は木棺の西部で、ガラス・瑪瑙製管玉約30個、ガラス製小玉400個以上からなる。他の1群は中部で屍体の南脇に置かれ、ガラス製勾玉3個、琥珀の丸玉600個以上であった。このことから、屍体は西枕であったことが考えられる。木棺外西側に素環頭太刀1口、鉄刀子1口が出土したが、これは木棺小口に平行して置かれたものらしい。鏡は墓壙内で木棺を囲む四隅にかたまつて検出され、墓壙南側が北側にくらべてより多くの鏡が見られた。いずれも破碎が著しい。このほかに須玖式土器片、黒耀石裂片が墓壙埋土に混入して発見された。埋葬とは無関係のものと考えられる。

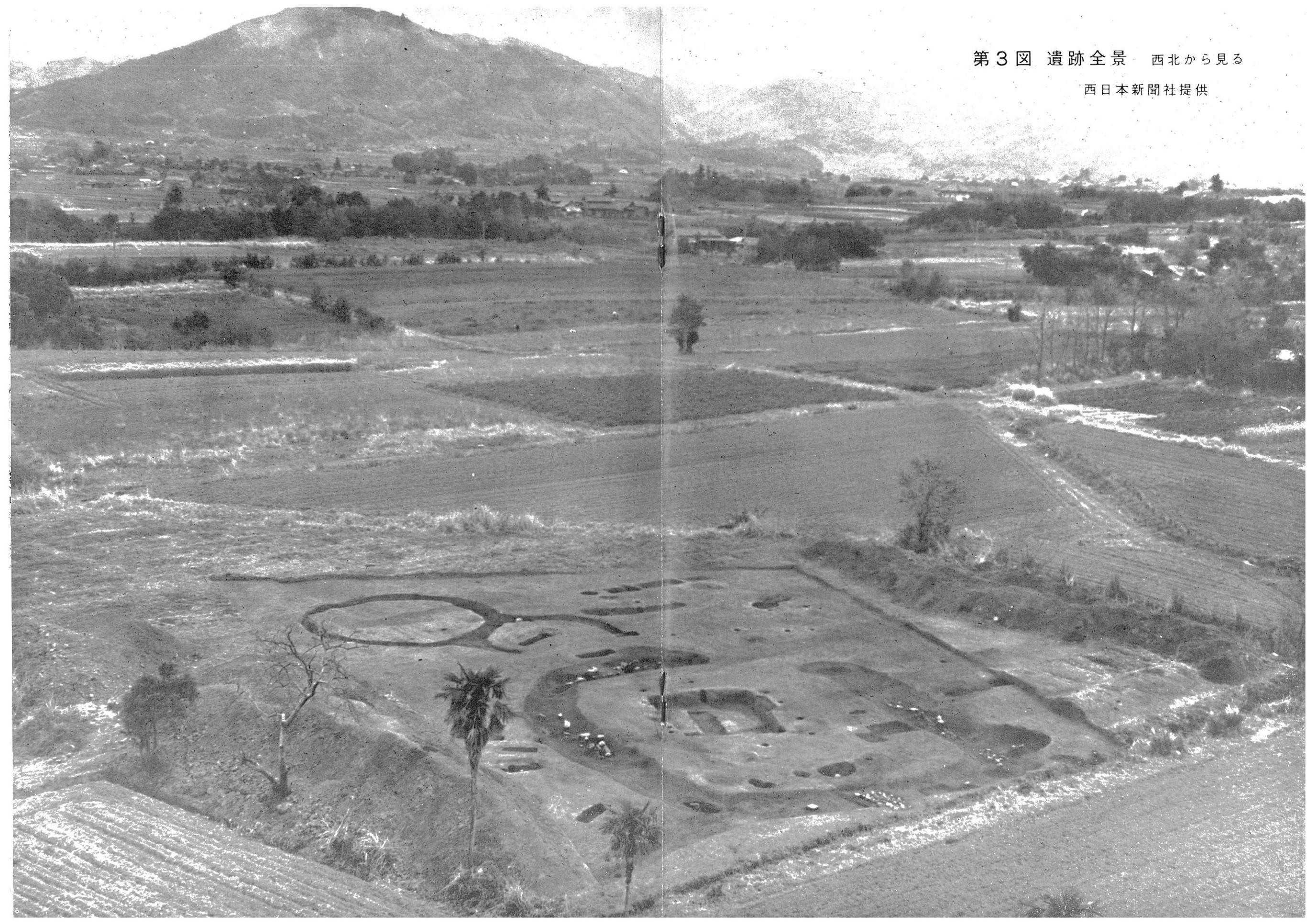
土壙周辺の柱穴群 土壙の周囲にかなり整然と柱穴群が発見された。先づ土壙の両短辺のほぼ中央に、土壙壁にきられて1本ずつの柱穴があり、その両外側に更に1本ずつ発見された。南側長辺には4本が一行にならんでいた。北側長辺には、やや不自然に6本ほどならんでいた。その大体から見ると銅鐸等に見る棟持柱をもつ古代切妻家屋の柱の状態にきわめて近い。殯宮関係と思われる。この殯宮の正面は東北にむいていたらしく、その方向の濠の外岸に鳥居らしい柱穴が2個ならんでいた。なお主墳の西側にも同様の柱穴が2組、濠の付近にあった。これは盛土後のものか。

第2図 鏡の出土状態 毎日新聞社提供



第3図 遺跡全景 西北から見る

西日本新聞社提供



外形 この内部構造の外に濠がめぐっていた。幅は現在、広狭があるが、大体約2mで、濠底は鍋底状にゆるく弧をえがく。もつとも深いところで、現地表から約50cm。なお濠の東南隅は、現状では濠が切れている。濠の土を内側に盛り上げることによって、若干の盛土をなしていたと思われる。濠全体の姿は、土壙をかこんで、東南側が半弧をなし、西北側が方形の、いわば盾形をなしていたらしい。濠も含めて、長径（土壙の長辺の方向）で18m、短径で14m。東南隅が高く、西北隅が低くなるようで、そこから更に北々西の方向に濠がつくられている。おそらく濠は排水のためであろう。この埋葬遺構が盛土をもつたらしいことは、土壙の木棺を割竹形とした場合、現地山の表面を50cmほどこえる点からも考えられる。

付設遺構 上記濠内には、大礫の群集が数箇所あった。その下はほとんどが土壙になっていて、中には、約300個の小玉とか、鉄鏃・鉈・弥生後期椀などを副葬していた。なお、この濠内には、鎌倉・江戸期などの新しい遺構も若干複合して見られたが一切省略する。

III 主墳発見の遺物

鏡 約38面分。完形で出土したものは1面もなく、すべて破砕が著しく、数千の細片になっていた。その内訳は大略次のとおり。

舶載鏡

1. 方格規矩鏡 約31面分。流雲紋縁と鋸齒紋縁の両者があるが、後者がはるかに多い。尚方作、陶氏作の銘を有するものもある。
2. 四螭鏡 1面。
3. 内行花文鏡 1面。長宜子孫の銘を有する。

仿製鏡

1. 内行花文鏡 4面。ともに径、約46.5cmの同型鏡で、八葉座であることが特に注意を引く。
2. 内行花文鏡 1面。径約27cm。擬銘を有する。

素環頭大刀 1口。鉄製。長さ約75cm。

鉄刀子 1口。

銅環 1個。

ガラス製勾玉 3個。ともに丁字頭で、青色を呈する。3個ともほぼ同大で長さ約3cm。

ガラス製管玉 20個以上。

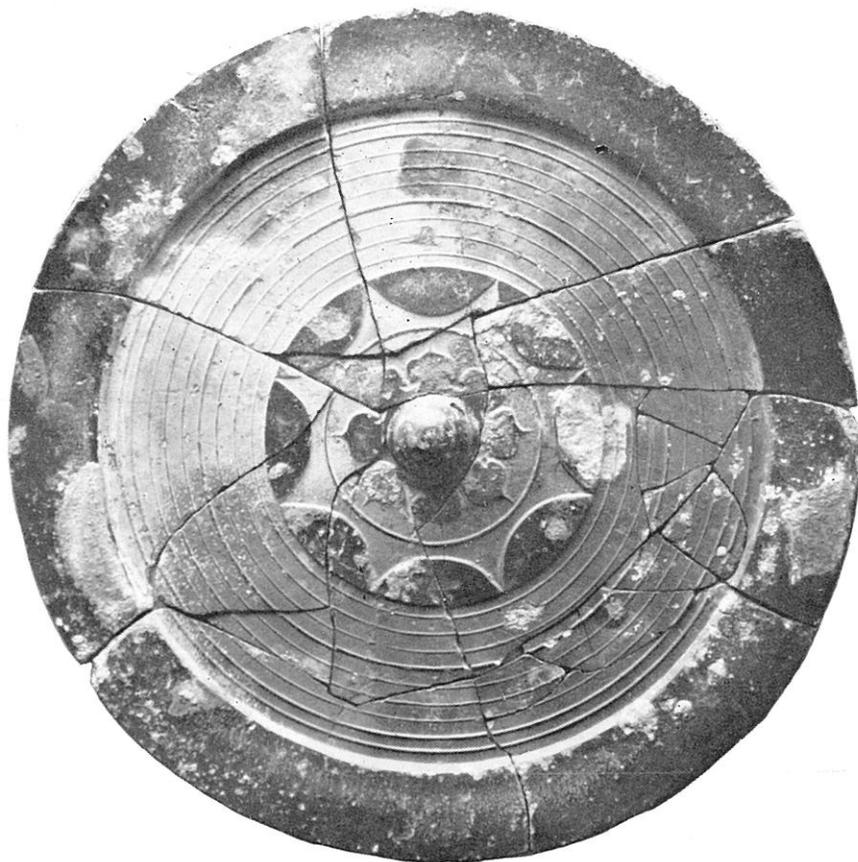
ガラス製小玉 400個以上。

瑪瑙製管玉 11個。

瑪瑙製小玉 1個。

琥珀製管玉 1個。

琥珀製丸玉 600個以上。



第4図 仿製内行花文鏡 径46.5cm

朱 多量。
弥生式土器片 須玖式で、墓壙内の埋土に混じて検出。
黒耀石裂片 若干。

IV その他の遺構と遺物

主墳の北および東側の濠外に長方形土壙が数基見られ、壙底に礫床をもつものもあり、大体弥生後・末期頃のものとして推定される。副葬品は見受けない。

主墳東側に径7m、幅25cm乃至1mの円形濠とこれに続く半円の同じ濠が発見されたが、円形濠の内部は柱穴2個と中央部に鉄刀子1個が検出された以外に墓壙らしいものは見られなかった。これに接する半円濠の内部は長方形土壙が検出されている。又、円形濠はその一部にガラス小玉あるいは土師器・鉄鏃などを伴う土壙群が掘り込まれ、この土壙群が連続して円形濠を形成するように見受けられた。

主墳東南側に四本柱の工房址が発見された。焼土・焼石・支脚・弥生中期初頭土器片・石剣を包含した弥生時代土器窯址と粘土取り場が工房内にあった。なお、その東隣に登り窯らしい遺構と、更にそれ以降の井戸が発見された。

V おわりに —遺跡の特殊性—

現在調査進行中のことでもあり、詳細は終了後の整理・研究をまたねばならない。現在迄に判明した点は平原の段丘上の高みに木棺内蔵の墳墓が営まれ、稀に見る豊富な鏡と玉類を副葬していたことである。鏡の大部分は漢中期の製作にかかり、大形の仿製鏡も長宜子孫内行花文鏡の形式を踏襲したものである。

主墳をめぐる土壌、その他の遺構も、多少の時期差をもって営まれたもので、主墳と無関係のものも存在する。この平原の通称ツカバタケに発見された主墳こそは、古代伊都国を代表する人物の奥津城として2世紀頃に営まれたものであろう。

到伊都国、官曰爾支、副曰泄謨觚、柄渠觚、有干餘戸、世有王、

——魏志倭人傳——

あ と が き

このたび、調査主任の原田大六氏から発掘調査の概要が提出されたので、印刷に付し、一般の参考に資する次第である。

なお、この調査については、前原町教育委員会はじめ各方面からいろいろ援助と協力をたまわった。とくに調査主任の原田大六氏には、調査について献身的な努力をされ、国・県費予算のほかに多大の私費をも投ぜられたものであること、また土地所有者の井手勇祐氏一家には、進行途上の蜜柑園造成計画をすべてご破算にしてこの調査に協力いただいたことを、特記して深甚の謝意を表する。

福岡県教育委員会

教育長 城 取 文 男

福岡県文化財調査報告書 第33集 昭和40年3月31日

発行 福岡県教育委員会 福岡市西中洲6街区29号

印刷 正光印刷株式会社 福岡市赤坂1丁目2の21